

## 教室環境におけるジョイント・アテンションの事例研究

研究代表者 古市直樹 (東京大学大学院教育学研究科 大学院生)

### 研究計画立案の背景と目的

授業中の発話内容や筆記内容を分析することは、授業中の学びを検討するための重要な手がかりとして盛んに行われてきた(e.g.「会話分析」を初め「談話分析」)。しかし、会話(聴く・話す)や読み書き自体は身体行為である。授業研究では、言語が重要な分析対象となってきたわりに、言語を扱う行為を分析する視座は確立されてこなかった。また、授業中の身体による相互行為全般を微視的に分析するための理論的概念も整備されていない。

授業中の見るという普遍的な身体行為、特に、三項関係のジョイント・アテンション(二者が同じ物を連鎖的に注視すること)(以下JA)に着目すると、授業中の教室空間における物(身体やその諸部位も含む)の位置関係とコミュニケーションとの関係を微視的に分析できる。よって、JAは授業研究における前述の問題を克服するための概念装置になりうると考えられる。授業研究におけるJAという概念装置の有効性を検討してゆくためにも、まず本研究では、具体的な授業場面におけるJAの機能を考察し理解することを目的とした。

### 研究方法

#### 〈調査の対象と方法〉

ある公立中学校で普段の授業場面の観察と記録を行った。撮影したのは主に社会科の授業である。当該学校では1コマの授業中にも地図や史料や条文や統計資料等の様々なJA対象が利用されるため、様々なJAや、JA間の様々な関係がみられるからである。

#### 〈分析とその結果の考察〉

事例の検討は、抽出された幾つかの授業場面について映像記録をもとに行われた。JAに関する身体行為を、物の位置関係への関心から幾つかに概念化して分析枠組みとした。

授業場面における具体的な当事者各々の学びの関係の生成過程を精緻に分析するために、まず小集団学習の事例を検討した。そしてその結果を踏まえ、学級全体での会話の場面について共同研究者各々が独立に分析し、その結果を小集団学習の事例の検討結果とも照らし合わせて考察した。

### 研究の結果、成果、今後の課題

検討した授業場面においてJAは、集団活動を成立させる機能、教材についての学びを促す機能、学び方の相互比較を生成させる機能をもっていた。

またそれらの機能は、特に、指すという身体行為(e.g. 図1)や、光(物)と音の関係(何が見えているか・何を注視しているかと、何が聞こえているか・何を聴いているかとの関係)や、物の同定(同一視)を重要な構成契機としていた。

本研究では、上記に示唆されるように、会話(聴く・話す)をより多面的・重層的なものとして分析できた他、授業の最中の協同的な読み書きや筆記内容の生成過程も分析できた。JAに着目する空間分析は、言語の生成過程と言語を扱う行為の生成過程とを一体として分析する視座を構築し授業研究の新たな方法を構想する手掛かりになると考えられる。

また、机上や黒板にある物へのJAや指す行為に着目することは、「雑談」や各自の(既存の)考えを伝え合うだけの議論とは異なる、教材についての学び合いとして授業中のコミュニケーションの生成過程を分析することに寄与した。そのため、(教材の)学びにおける協力や協調性の自己目的化を克服してゆく上でも重要になると考えられる。

今後はより多くの事例を分析し、事例を類型化して授業中のJAの一般的機能を実証的に解明したい。また、JAに着目して空間分析という授業研究の新たな方法を開発してゆく上では、「反転授業」等におけるICT機器のユーザインタフェースを検討することも有益であろう。

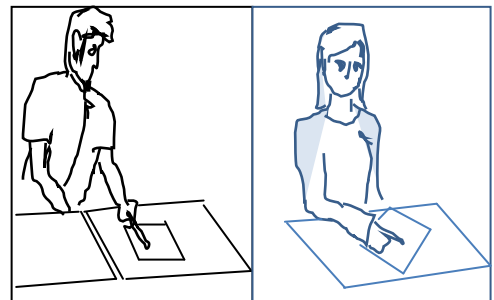


図1 小集団学習場面の指す行為の例  
presenting (相手の手元で示す行為) としての指す行為(左)と、showing (自分の手元で示す行為) としての指す行為(右)